

ARTLET

46

慶應義塾大学アート・センター ARTLET 第46号

FEATURE ARTICLES

スポーツ——拡張する身体

身体という生地
斎藤 慶典

超人スポーツが描く未来
南澤 孝太

近未来の身体文化についての一考察
桑川 麻里生

福澤諭吉と「身体」
都倉 武之

TOPICS

活躍する先輩『二人の自分』
児玉 明子

INFORMATION

活動報告



上：超人スポーツ「Bubble Jumper」 <http://bubblejumper.com/>
下：禁止論も多いボクシングは《拡張された身体》とともに生き残るのか

スポーツ—— 拡張する身体

リオ五輪も終わり、いよいよ2020東京五輪・パラリンピックへの助走が各所で始まっている。もとより、オリンピックが“国威高揚”につなごうとした時代は去った。さまざまな問題を抱えつつもこの世界最大のスポーツの祭典が開催される意義があるとすれば、それは身体文化・市民文化・生活文化としての《スポーツ》を再考察するところから見いだされるものであろう。

おりしも、哲学的にも、テクノロジー的にも、身体、知覚、経験の“拡張”ということが極めて興味深いテーマとなっている。

新時代のスポーツを支えるような新しいヒューマニズムはどこに見出されるのだろうか——。

2006年サッカー・W杯ドイツ大会のパブリックビューイング会場

身体という生地

斎藤 慶典

(慶應義塾大学文学部教授)

TEXT: SAITO, Yoshimichi

身体は生命の基本形式である。身体なしの生命など考えられないし、それはほとんど形容矛盾ですらある。だが、身体はどのような仕方 で存在しているのだろうか。

生命という存在秩序が成り立つためには、膜によって相対的に隔てられた「内と外」という構造が確立され、この構造を維持するためにその内と外の間で絶えず物質がやり取りされなければならない。このやり取りを通じて、「内と外」構造が絶えず再産出されるのだ。原子から、銀河を構成する星々にいたるまで、生命を持たない単なる物質は、この構造を持たない。一見すると、原子であれ星々であれ、その内部を持つているように見えるかもしれない。だが、内部にも見えるそれは、一方的に崩壊していくのみで、自己を維持するということがない。そもそも、維持し・再産出されるべき自己なるものがいまだ成立していないのだ。原子を構成する原子核と、その周りを回る電子は、(それらを結び付ける力が働いているにもかかわらず)ただ並びあつて

るだけで、相互外在的すなわち「どこにも内部はない」のである。

これに対して、生命においては、膜によって外と隔てられた内は、外との間で物質の選択的なやり取りを行なう。取り入れるべきものと、排除・排出すべきものがあるのだ。つまり、物質が内との間に固有の関係を取り結ぶのである。この関係なしには内外構造が維持・再生産されない以上、この関係は「内的な」関係と言ってよい。内や外のものがそのようなものとして(取り入れるべき養分として、排出すべき排泄物として)姿を現わす固有の次元が開かれたのだ。この次元は、外から眺めるということができない。当の生命体にのみ開かれた、何かが何かとして現象する場所、それが生命に固有の「内」なのだ。単なる物質にあつては、それに対して何かが現象することがない。路傍の石には、それを支える大地も、それを照らし出す陽光も、そのようなものとして姿を現わすことがない。石には、何かがそれに対して現象する場所(すなわち「内」)が、いまだ開かれていないのである。生命体にあつてこの「内」が開かれる基本単位、それが膜によって外と隔てられた内であり、これが身体なのだ。つまり身体は、単に膜によって外と区切られた物理的空間ではなく、何かが何かとして現象する次元を開くもの、この意味での「内」への通路なのである。身体が機能することで、「内」なる次元が開かれる。

こうして開かれた「内」なる次元に、取り入れるべき養分や排出すべき排泄物が姿を現わすことを

通して、内と外との間に交流が生じる(この交流における内と外は物理的次元におけるそれである)。これが物質交代であり、代謝である。この交流によって、生命は維持される。内と外とのこの交流が膜としての身体が存在理由である以上、その機能の及ぶ範囲が膜の内側にとどまらないことは、すでに明らかだろう。では、その機能が及ぶ範囲は、どれほどのものだろうか。膜の外のどれくらいの範囲にまで、その機能は及ぶのか。

単細胞生物のような原始的な生命体(図1)においては、その機能が及ぶ範囲は膜のごく近傍、おそらくは膜と接触する範囲に限定されているだろう。膜と接触することで取り入れるべき養分や避けるべき有害なものがいわば認知されるのであり、この認知の及ぶ範囲が当の生命体にとって世界のすべてなのだ。では、本号のテーマである人体、つまり私たちの身体(という膜)においては、事情はどのようなになっているだろうか。その機能が及ぶ範囲がもはや膜、つまり皮膚との接触面にとどまらないことは、言うまでもない。

身近で、誰でも思い当たるはずの例を引き合いに出そう。車を運転する際の、いわゆる車輛感覚である。日頃から乗り慣れている車輛に乗っているとき、私たちの皮膚感覚は当該車輛の車幅や車高の先端にまで拡張される。狭い道を通るときには両手両脇をぎゅっと脇腹に押し付けながらハンドルを握るし、低いトンネルや線路下の橋脚を通り抜けるときには思わず首を縮めるだろう。これはすなわち、車

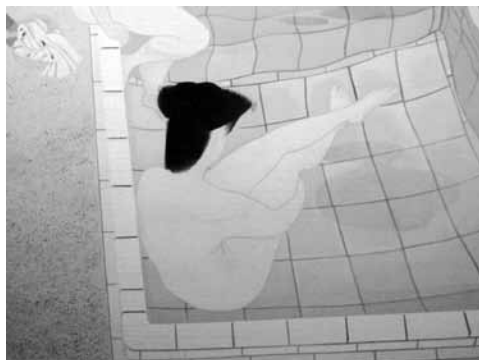


図2 小倉遊亀『浴女 その一』(1938年) 東京国立近代美術館蔵(部分)



図3 ドガ『休息する二人の踊り子』(1898年) オルセー美術館蔵
休憩中の二人の踊りの身体からは、彼女らのまとう衣装の拡がりをも通して、画面全体に束の間の休息の寛いだ気分が充満している



図4 セザンヌ『サント・ヴィクトワール山』(1904年)
フィラデルフィア美術館蔵

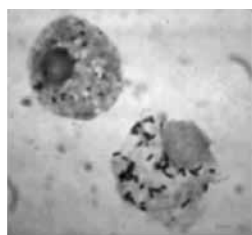


図1 食食細胞内に取り込まれた細菌(原核細胞)
<https://en.wikipedia.org/wiki/Phagocyte>

の横幅いっぱいまでが私の両手両脇両肩なのであり、車の屋根のてっぺんまでが私の頭なのである。

この感覚を見事に絵画化したものとして、小倉遊亀の『浴女 その一』(図2)を挙げることができる。浴槽いっぱいに満たされて揺らぐ湯の隅々にまで、湯舟に身を沈めた彼女の身体感覚は溶け出して、いまや浴槽の全体が彼女の身体なのである。その身体は穏やかに揺らぎたゆたう湯水と溶け合って、湯舟の隅々で寛いでいる(これは比喩ではない)。このとき彼女の身体は、皮膚が直かに触れている物質(湯水)を伝って、その末端の隅々にまで伸び拡がっている。先の車輛感覚の場合も同様である。私が腰掛けしている座席や握り締めるハンドルを伝って、皮膚感覚が車輛の隅々にまで拡がっていったのである(図3をも参照)。

だが、身体の拡張はこれにとどまらない。皮膚に直かに接する空間を、それはいともやすやすと跳び越えてしまうのだ。主著『知覚の現象学』で知られる戦後フランスを代表する身体哲学者モーリス・メルロ＝ポンティ(1908-1961)が引き合いに出していた例だったと記憶するが、あなたがテレビでサッカーの試合を観戦する場面を想像してほしい。試合が白熱してくると、最前チームの選手の一挙手一投足に、知らず知らずの内にあなたの身体の動きも同調してはこないだろうか。ゴール・ポスト前の混戦の中からボロリとこぼれ球が味方の選手の眼前に転がり出て来たときなど、思わずあなたは利き足を蹴り上げてはいないか。このとき、あなたの身体は電波を媒介にして、はるか地球の裏側の、たとえばリオの競技場のグラウンドにまで馳せ参じているのだ。

こうして見てくると、私たちの身体の拡張がいったいどこまで拡がることになるのかを、あらためて検討してみる必要に迫られる。何しろこの拡張は、いまや地球の裏側にまで及んだからだ。

空間的な距離の長さという点ではリオの競技場ほど遠方にあるわけではないが、故郷の街ではるか前方にそびえるサント・ヴィクトワール山を繰り返して描いたセザンヌの絵を引き合いに出そう(図4)。セザンヌは視覚に若干の異常があったという話をどこかで読んだ覚えがあるが、事の真偽にかかわらず、彼の絵に描かれた対象たち(サント・ヴィクトワール山にかぎらず、彼の静物画にたびたび登場する果物や敷布たちもそうなのだが)が持つ独特の質感と揺るぎない存在感は、そうした彼に固有の視覚なしには決して見えるものとならなかっただろう。してみれば彼の眼は、広々とした裾野を従えて画面のはるか前方いっぱいにそびえたつサント・ヴィクトワール山とその背後に白い雲を浮かべて拡がる青空の彼方まで、それらすべてに浸透していることになる。はるか彼方の青空にまで伸び拡がる空間のすべては、彼に固有の視覚に満たされることで、そのような姿でおのれを顕わにしたのだ。

もう、お分かりだろう。私たちの身体は、およそ私たちが五感(視覚、触覚、嗅覚、味覚、聴覚)を通して接しうるすべてに及んでいるのだ。いや、それは五感にすら限定されない。いわゆる第六感をそれに含めてもよいし、私たちが頭で理解するすべてにまで、すなわち思考しうるかぎりのすべてにまで、私たちの身体は及んでいる。私たちは大脳なしには決して思考することができないのだし、言うまでもなく大脳は私たちの身体の一部だからだ。

してみれば、いまあなたが思い浮かべる数式——たとえばアインシュタインのエネルギー方程式 $E=mc^2$ ——にも、あなたの身体が浸透しているのである。あなたが、あるいはほかの誰かがそれを思い浮かべないかぎり、 $E=mc^2$ が $E=mc^2$ として姿を現わすことは決してないことを、夢にも忘れてはならないのだ。複雑な計算と巨大な観測装置の助けを借りてようやく私たちの前に姿を現わした(かたやミクロ

の)素粒子たちの世界も(かたやマクロの)太陽系のはるか彼方に浮かぶ銀河たちの世界も、事情は同様である。

いまや、こう言うてよい。ミクロであれマクロであれ物理的な対象から成る世界も、数学の世界も、絵画や音楽の世界も、そして言うまでもなく私たちが日々出会っているさまざまな事物や出来事も、およそ私たちが何らかの仕方では会いうるもののすべてに、すなわち世界の隅々にまで、私たちの身体はくまなく浸透しているのである。この意味で、「世界は身体という生地で織り上げられている」(メルロ＝ポンティ)のだ。この表現もまた、比喩ではない。文字通り「生きられた地」である身体という基盤の上に世界は築かれているのであり、このかぎりでは身体と世界は完全に外延を等しくしている。身体が開く「内」なる次元は、実は世界のことだったのだ。

最後に一言、スポーツについても触れておこう。ここまでの話は、世界を主として空間的拡がりにおいて見てきたわけだが、世界には時間的拡がりもまた不可欠であることを見逃してはならない。世界はいま現在において存在するばかりでなく、過去と未来という「もはやない時」と「いまだない時」を孕んで存在している。時間の奥行きが、世界を包んでいるのだ。この奥行きは私たちの身体において、習慣という仕方では具体化される。これまで行なってきたさまざまな活動が身体には沈殿しており、このようにして「身に付いた」習慣がこれからの活動の土台となるのである。(武術を含む)スポーツは、身体の習慣性の鍛錬を通じてその行動＝運動能力を拡張・高度化し、場合によっては新たな活動空間を開かんとする試みであり、おそらくは私たち人間に固有の試みにほかならない。スポーツにおいては身体の鍛錬が、そのまま新たな世界の獲得の試みなのである。



「超人スポーツ」コンセプトイメージ



超人スポーツ「キャリオット」



第1回「超人スポーツハッカソン」



超人スポーツ「Bubble Jumper」



岩手発・超人スポーツプロジェクトにおけるワークショップ

超人スポーツが描く未来

南澤 孝太

(慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科准教授
／超人スポーツ協会事務局長)

TEXT: MINAMIZAWA, Kouta

リオ・オリンピックの閉会式において行われた2020年東京大会のプレゼンテーション。安倍首相がスーパーマリオに扮し、AR(拡張現実感)やプロジェクションマッピングなど最先端のテクノロジーを駆使した演出に世界中が熱狂した。古の伝統とポップな文化、未来的なテクノロジーを融合し、来る2020年に日本が提示するオリンピック・パラリンピックの未来の姿を予見させるものであった。

遡ること2年、2014年10月に、メディアデザイン研究科の中村伊知哉教授、稲見昌彦教授(現 東京大学教授)らとの協働プロジェクトとして、2020年に向けて身体とテクノロジーを融合した「人機一体」の新たなスポーツを生み出そうという試み「超人スポーツ」が立ち上がった。人間の身体能力を補綴・拡張する身体拡張工学に基づき、人の運動能力や感覚能力を超える力を身につけ「人の能力を超える」。健常者／障害者／高齢者／子供など、異なる身体能力を持つ人々の間をテクノロジーで繋ぎ、年齢や障害などの身体差により生じる「人と人のバ

リアを超える」。超人スポーツは、バーチャルリアリティ、ロボティクス、ウェアラブル技術など最先端の研究成果をスポーツの領域に取り入れることで、身体／道具／フィールド／観戦／トレーニングなどスポーツの様々な要素を拡張し、スポーツの可能性を広げることを狙う。

2020年を契機として、日本の最先端技術と文化をスポーツという形で具現化し世界に発信する。得意不得意・年齢・障害・資格を問わず、誰もがスポーツを創り楽しむ未来の日常を創出する。そのような未来を具現化するため、2015年6月には「超人スポーツ協会」を設立。翌7月には第1回「超人スポーツハッカソン」を開催し、エンジニア／デザイナー／アスリート／学生など百名以上が参加して、「Bubble Jumper」や「キャリオット」など、2日間で8つの新しいスポーツが誕生した。2015年10月に開催した「超人スポーツEXPO」では、快晴に恵まれたお台場の公園で、子供から大人まで数百人が生まれたばかりの新たなスポーツを実際にプレイして楽しんだ。

近代スポーツが確立して以降、スポーツとは予め定められたルールの下で身体能力を強化し競い合うものであった。しかし超人スポーツが目指すのは、アスリート、デザイナー、エンジニアなど異なる技能を持つ人々が一緒になって新たなスポーツを創造する「スポーツ・クリエーション」の文化の創出である。協会の活動も2年目に突入し、「スポーツを創ろう」という呼びかけは、我々自身の予想をも

はるかに上回る広がりを見せている。

本年の国体開催県であり「拡張国体」を提唱する岩手県では、スポーツの概念を拡張することで国体を通じた新たなレガシーを作り出すことを目指し、2016年4月より「岩手発・超人スポーツプロジェクト」を始動した。県内の様々な大学・専門学校の学生が集い、岩手ならではの新たなスポーツを創り出す。スポーツを生み出す過程において、自分たちが暮らす岩手県の伝統や特徴を改めて見直し、それをスポーツとして再構築するプロセスは、地域の魅力を再発見する手段としても極めて有効であった。

東京においても、2016年9月には第3回となる「超人スポーツハッカソン」、11月にはこれまでに開発された様々な超人スポーツ競技が一堂に会して競技者同士が競い合う「超人スポーツゲームズ」が開催される。今年もまた新たなスポーツが創造され、テクノロジーによって拡張される身体の新たな可能性を示してくれるだろう。

超人スポーツ協会: <http://superhuman-sports.org/>



ヘルマン・ヘッセ(1877-1962)

近未来の身体文化についての考察

糸川 麻里生

(慶應義塾大学文学部教授/アート・センター副所長)

TEXT: KUMEKAWA, Mario

2020年に本当に東京五輪をやるのだろうか。この日本の8月に？ただでさえ「熱中症にご注意を」と言っているのに、正気の沙汰ではない(サッカーなどのリーグ戦が8月下旬に始まってしまうので、秋にはできない、というのだが……。)東日本大震災など、相次いだ大天災からの復興もまだまだ道は遠いし、福島原発事故の後遺症から日本社会が立ち直れるのも、いつのことになるか分からない。その上、さまざまな利権まみれのスキャンダルが立て続けに報じられる。「こんな時に、こんな日本で、何がオリンピックだ!」という人たちの気持ちには、私もまったく共感する。

そもそも、現代社会においては、オリンピックを開催する意義がどこにあるのかさえ、はっきりしなくなってしまった。リオデジャネイロでは、給料がもらえない警察官たちが「地獄へようこそ」という横断幕を掲げて、五輪開催に反対するデモを行ったという。ドイツのハンブルク市はオリンピック開催地への立候補を、住民投票によって取り消させ

た。もはや、五輪開催は国威高揚にはならないし、経済振興だって怪しいものだ。オリンピックを返上できるものなら、やはりその方がよっぽどいいのかもしれない。

しかし、それとは別の話として、人類の、少なくとも日本の未来はやはり「スポーツ」にかかっていることも、また事実だと思うのだ。なにしろ、この少子高齢化である。ぴんぴんして活動的なお年寄りを増やさないことには、健康保険も、介護保険も、につきもさっちもいなくなるだろう。そのためには、ウェルネスであり、各種健康法であり、スポーツだ。こういった身体文化の高度な発達無くしては、わが国のお先は真つ暗であろう。

そんなビジョンのもと、ドイツ文学者である私も、知人の整体師たちのもとで、数年前から整体と気功を習い始めた。身体と「気持ち」を用いて、心身の調子を整えていくという技法である。これがやってみると、ことのほか本業の役にも立つ。たとえば、ゲーテは「掴む」次元にまで「見る」ことを鍛え上げろ、と言った。整体をやっていると、まさにそれこそが身体感覚の目指すべきことであることがわかる。触覚や体感なくして正常な視覚はありえないこと、言い換えれば、視覚は体感に根拠づけられていることが、身体の微妙な状態を「手先」と「^{はら}肚」で感じ取る訓練をしていると、分かって来るのだ。そして、こういう感覚は、スポーツのコーチングにも大いに使えることは、多くの整体師たちがすでに実践していることである。

だが、スポーツの重要性は、他の側面からも増大してくるはずだ。さまざまな産業テクノロジーだけでなく、ロボット技術や人工知能も、一般人の想像をはるかに超えて発達していくことだろう。農業も、工業も、商業も、いずれはロボットたちが勝手に営んでくれることになるだろう。そうなれば、お金は、働いた代償としてもらうものではなくなるかもしれない。政府なり、公共機関なりが、ある一定のルールのもとに、必要にして十分な額の紙幣を、何もしくなくても配給してくれるような世の中が来るのかもしれない。その時、「労働」から解放された人類は何をするのか？「遊ぶ」しかないではないか。

しかし、人間が「身体」を必要としなくなることは、少なくとも私には考えられない。いや、仮に肉体的器官に機械的装置がとって代わるとしても、そこで「知覚」と「行為」がおこるとすれば、それは「身体」である。すると、身体を用いた遊び、すなわちスポーツこそが、人類がこの世に生まれてすべきことということになるのかもしれない。そうなれば、スポーツはさまざまなアートとゲームの成果を取り入れて、人類が皆して取り組むべき、宗教的営為として大いなる発展を遂げるのだろう。ヘルマン・ヘッセが描いた『ガラス玉演戯』には、スポーツの要素が色濃く入ってくるはずだ。その時初めて、古代ギリシャの神々にオリンピアの競技が捧げられた意味が明らかになるのかもしれない。



1875年頃の慶應義塾構内図には「運動場」の文字と器具が描かれている(写真上部)



庭球部早慶戦記念写真(1906年5月5日)。後列左から3人目に小泉信三



学徒出陣に際して行われたいわゆる「最後の早慶戦」における慶應選手(1943年10月16日)

福澤諭吉と「身体」

都倉 武之

(慶應義塾福澤研究センター准教授)

TEXT: TOKURA Takeyuki

福澤諭吉は、「身体」を自覚した人であった。人間の知的活動の器である体を、観念的ではなく、有機物として、物質として、即物的に意識したことに福澤の思想家としての出発があった、といって過言ではない。

この自覚が生まれる契機は福澤の人生の随所にあった。まず生い立ちである。彼は、10年来郷里中津を離れて大坂に赴任中の福澤家に生まれたが、間もなく父と死別。中津に帰った一家は、万事大坂風で、話し方や服装、暮らし方などの些細な点で地元の人々と馴染めず疎まれた。それに加えて下級武士としての身分は、幼少の福澤の日常に理不尽な差別を見せつける。福澤は他者と自分を見比べ、一個の人間として何ら差異のない自らの肉体を意識したと考えられるのである。5尺7寸余(約173センチ)という偉丈夫であったことも、フィジカルな自我への意識を強くしたのであろう。

そして緒方洪庵の適塾における、医学を中心とした自然科学の勉強体験である。自らの肉体が、如何なる科学的作用によって機能しているかということへの明確な自覚が生まれる。中津での原体験で福澤に胚胎し、適塾で成長したこの身体観は、3度

の外遊を経て、彼の視座を貫く背骨となる。自分が特殊ではなく、同様に他者も特殊ではないという自覚は、人が平等で、個が同等に尊重されるべきこと、誰もが学問によって等しく成長しうる存在であるという人間観を生み出す。この思想はまさに福澤による「身体」の発見の賜なのである。

「身体」は、個の活発なる知的活動をより豊かに発展させる可能性を持つ器であり、その健全な発達を促すこと自体が教育の目的たり得る。知的活動だけでなく、忘れられている身体の発育、すなわち体育の場が慶應義塾となった。1868年の慶應義塾構内図には「運動場」があり、「食堂規則」では食後に「ジムナスチック」が奨励されている(「慶應義塾之記」、1869年版)。1875年頃の構内図では、運動器具らしきものが描かれている。この運動に武士の嗜みとしての武芸の面影はない。

福澤は、同時に体育それ自体が目的化することを強く否定し続けた。「体育は人をして不羈独立の生活を得せしむるの手段…書生の輩が体育を口実として漫に遊戲に耽り学業を怠り、剩さず肉体の強壮なるに任せて有りとあらゆる不養生を行い、不品行を働ぎ、独り得々たるが如きに至ては、実に言語道断」(「体育の目的を忘るゝ勿れ」、1893年)と記す『時事新報』社説はその意図を明確にしている。

あたかもその頃から体育の各種競技は多様化し、洗練されていった。慶應に7部からなる体育会が結成されるのは1892年。さらに、野球の早慶戦が開始されるのは福澤没後2年の1903年、早慶レガッタ開始は1905年である。慶應が日本のルーツ校として誇るラグビー部(蹴球部)は1899年、ホッケー部は1906年に結成される。現在体育会は43部か

らなり、慶應義塾の学校法人としての組織図上に位置づけられている。これは諸大学間で稀なことのようにである。

スポーツを通じて知的活動が拡張される——すなわちスポーツ自体が持つ教育的効果を慶應義塾において積極的に意義づけたのは小泉信三である。工夫研究して練習を重ね、技の優劣を競い、勝利に向けて全力を尽くすこと自体が、まさに知的活動でもあり、あらゆることを学ぶ教育そのものだというのである。「かりに対校競技に熱中した体験を持たずに終わった学生生活は、学生生活というに値しない、というものがあっても、それはさほどの言い過ぎとは思われない。たかが運動競技などというのは、出世主義の秀才あたりの言い草に過ぎない」(「大学野球」、1963年)という言葉はそれを端的に示す。

福澤が恐れたのは競技自体の洗練が、武芸を教養として重んじたかつての武士のように、虚飾的、非合理的で身体健康管理とは無縁な形式主義、精神主義に墮落することであった。換言すれば実学的視点の喪失である。事実、日本のスポーツ界はその道をたどったともいえる。精神性の追求は、例えば「野球道」という語を生む。戦時下においては、同じ野球が敵性スポーツとして弾圧され、武道が奨励されるのである。

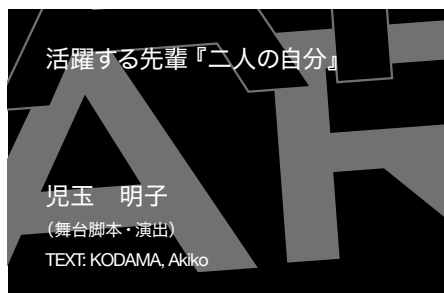
慶應義塾においては今日もスポーツが学問より過度に優先されることを嫌う意識が高い。それを最近では「文武両道」と表すことが多いようだが、精神主義の残り香がする「道」という語に若干の違和感も覚える。福澤の飾り気のない(身も蓋もない)実学的な身体観も、時に強調したい。



©岸本斉史 スコット／集英社
©ライブ・スペクタクル「NARUTO —ナルト—」製作委員会2015



©真島ヒロ／講談社
©「FAIRY TAIL」舞台製作委員会2016



まず最初に自己紹介を致しますと、法学部政治学科在学中に宝塚歌劇団の演出助手に合格し、1年間学生と歌劇団の唄託としての仕事を両立後、大学を卒業。そして歌劇団に入団。大学の専攻とは全く畑違いの演劇の世界に初めて足を踏み入れました。以後、演劇をゼロから宝塚で教え込んで頂き、それから約十年後、文化庁の新進芸術家海外研修制度にて、カナダのケベック州・モントリオールで一年間演劇留学。帰国後、宝塚に復職し、その三年後に退団。現在はフリーランスとして掲載写真のような舞台を脚本・演出するようになり、三年ほど経ちます。簡単に申しますと、社会人になってから私にとっては有難いことに、ずっと脚本・演出の仕事で演劇の世界を彷徨っているという次第です。

恐れ多くも『活躍する先輩』というタイトルです。で、塾生で演劇を目指している方は少人数でしょうから、今回は演劇のことだけに特化せず、後輩の皆様に向けて執筆したいと思います。こんな考え方の人もいるんだ、というような感覚でご拝読頂けたら幸いです。

私は特に若い頃に悩みが多かったのですが、そ

れらは総体すると「認められたい」ということからきていた気がします。人として誰かに認められたい。仕事を評価され認められたい。認められることによって社会の一員であることを実感し、安心したい。だからそれが上手く行かない時、疎外感や孤独を感じ、もがき苦しみ、誰かに何かに頼り、その場は凌いだとしても、根本的には解決していないので、また知らず知らずに同じことを繰り返してしまう……。

そんな負のスパイラルが変わったのは、友人のある言葉でした。「どんな時でも自分だけをずっと見てくれて、ずっと思ってくれて、どんな自分でも必ず受け入れてくれる人が誰でもこの世にたった一人だけいる。それは自分自身だ。」この時の衝撃は忘れられません。それから少しずつですが確かな安心感が得られるようになりました。二重人格とは異なると思うのですが、今でははっきり二人の自分を自覚しています。一人は持って生まれた私のエッセンス。もしも輪廻転生が存在するなら、おそらくずっと変わらないままの魂の源？のような自分。もう一人はこの時代のこの地域に両親から生まれ、「児玉明子」と名付けられ、今の肉体と感情を持っている自分。何といったら良いのでしょうか？先に書いたエッセンスの自分だけでは、実際に動くことも仕事をすることも出来ません。ですので後者の自分の肉体や感情という容れ物を借りて初めて、様々な実行動を可能に出来るというわけです。では後者だけではどうなのか？という、殊私に関してですが、自分らしい作品を作れないですぐにアイデアや想像力が尽きて、今の仕事は続かなくなってしまうだろうと思います。こうして原稿を書いている今に例えるなら

ば、アイデアや全体の流れは前者の自分が次々と発しています。それをより分かりやすい文章に変換しつつ、実際にパソコンで打ち込む作業を行う……というのが後者の自分という次第です。

そしてこのように二人の自分を自覚出来るようになってから、より自分自身を大切に出来るようになりました。特に身体や感情は今現在レンタルで使わせて頂いている、大切な借り物です。それを自分自身でむやみに傷付けるなんて可哀想。申し訳ないです。また困難やアクシデント、嫌な状況が起こった時でも、これは借りている感情が動揺したり自分を守ろうとしてそう感じているだけで、果たして実際にそうなのだろうか？では同じようにレンタルしているであろう他の人はどう感じているのだろうか？……なんて自然に思っていると、その状況に少しは客観的になれるのでしょうか、慌てて言動して自滅することも少なくなりました。

学生時代を経て、これから様々な出来事が皆様を待っていると思います。私の友人の中には、その悩みや迷いから突発的に自らの命を断ってしまった友もいます。今回の文章がどなたかの何かの機会にふと思い出されて、もし少しでもその方の気持ちが楽になれることがあったら、大変嬉しく思います。

ちなみにこんな私の座右の銘は「執着しない。抵抗しない。判断しない。」です。残りの文字数が迫っておりますので、もしまたの機会がありましたら、詳しくはその時に(笑)ー。

活動報告

■催事

大野慶人レクチャー&パフォーマンス「舞踏という生き方」(新入生歓迎行事)

2016年4月22日(金)日吉キャンパス来往舎イベントテラス

主催：教養研究センター日吉行事企画委員会(HAPP)、アートセンター

土方巽と共に初期から舞踏を担い、国内外で盛んな舞踏活動を行う大野慶人が、好評だった昨年に引き続き出演。150名を超える観客が来場した。今年は舞踏の前に公開ワークショップを行い、舞踏に対する考え方を示しながら自然にパフォーマンスへと移行。大野慶人独特のユーモアあふれる動きで観客の心を包み込んだ。「舞踏は祈り」という大野慶人の思想が来往舎の広い空間に満ちた時間であった。

レクチャー・コンサート19世紀の音楽受容III 「ヴィルトゥオーソのためのピアノ協奏曲」

2016年7月9日(土)三田キャンパス北館ホール

「ヴィルトゥオーソのためのピアノ協奏曲」をテーマとしたレクチャー・コンサートを遠山記念音楽研究基金の助成により開催した。前半、本企画の代表者である福田弥(文学部准教授、音楽学)が講演したのち、後半は、ピアニストに仲道郁代氏、さらに日本を代表する弦楽器奏者を招聘して、ショパンのピアノ協奏曲へ短調を室内楽稿で演奏して頂いた。ソリストの存在を際立たせるための様々な工夫について解説した内容を、実際の演奏を通して確認できる良き機会となった。

国際研究会・ワークショップ「アート・アーカイブの諸相」

Connecting through Art Archives: Archives for the Preservation and Creation of Culture

2016年6月20日(月)三田キャンパス東館 G-Sec Lab

スミソニアン博物館のアート・アーカイブ(Archives of American Art: AAA) 副所長ライザ・カーウィン博士(Dr. Liza Kirwin)と情報資源部長 カレン・B・ヴァイス氏(Karen B. Weiss)を講師に招き、住友文彦氏(アーツ前橋館長)、松山ひとみ氏(東京国立近代美術館フィルムセンター)、アート・センターから桑川麻里生教授、渡部葉子(訪問所員)、本間友(所員)をディスカッションとして、ワークショップを開催した。大学や美術館を中心にアーカイブの現場を担う専門家と研究者が集い、アーカイブの哲学、アーカイブ資料と展覧会や美術作品の関係、デジタル化時代のアーカイブ、研究プラットフォームとしてのアーカイブなど、幅広い観点から積極的な対話が行われた。

ガイドツアー&ワークショップ 「三田山上で出会う近代建築と彫刻」

2016年8月1日(月)ー31日(水)

港区ミュージアムネットワークのイベント(ミナコレ)の一環として、演説館を含む三田キャンパスの建築物や彫刻を一般公開し、案内マップを配布、スマートホンによる音声ガイドを提供した。8月26日(金)にはガイドツアー、27日(土)には旧ノグチ・ルームで親子を対象としたワークショップを開催した。

■アート・スペース展示

アート・アーカイブ資料展XIII『東京ビエンナーレ'70 再び』展

2016年2月22日(月)ー3月25日(金)

1970年に開催された第10回日本国際美術展、通称『東京ビエンナーレ』は、コミッショナーに中原佑介を迎え、若き日のクリスト、リチャード・セラ、河原温ら40人の作家の半分以上が「人間と物質(の間)」をテーマに、場と作品の関わりを重視する、中原の言うところの「臨場主義」のもと会場で制作を行った。本展では、アート・センターが所管するアーカイブ資料をもとに、これまで知られていなかった、各作品の旧東京都美術館における配置を検証し、それを再現した会場のアクリル模型を作成。各作品と制作風景のモノクロ写真多数を公式カタログやポスターと共に展示し、歴史的展覧会の研究に新たな一歩を記した。この展覧会には約340名の来場があった。

アート・アーカイブ資料展XIV『鎌鼬美術館開設記念 KAMAITACHIとTASHIRO』展

2016年6月1日(水)ー7月15日(金)

1965年に撮影された細江英公の写真集『鎌鼬』は、今日では世界の写真史に列せられている。その土方巽を被写体とした写真の撮影は、秋田県羽後町田代の村で行われた。撮影から半世紀を超えた今秋、同地に鎌鼬美術館が開館する。本展は、その開館を記念し、『鎌鼬』のオリジナルプリントの展示とともに、鎌鼬の里と呼ばれる田代を紹介する展覧会であった。田代の里の四季の写真やドローンによる空撮映像、さらには稲架の実物展示を行って、日本の原風景とも言える稲架のある風景を印象づけた。また、横尾忠則デザインのポスター、細江秘蔵のコンタクト帳、『鎌鼬』の関連資料も加えて充実した展示となった。来場者は約470名。初日と最終日には、関連のシンポジウムを実施。無料配付した冊子も好評であった。

■アート・スペース展示 今後の開催予定

文学部 古文書室展IV『書き留められた移動』 2016年10月3日(月)ー2016年10月28日(金)

センチュリー文化財団寄託品展覧会 『描かれた古ー近世日本の好古と書物出版ー』 2016年11月14日(月)ー12月16日(金)

アート・アーカイブ資料展XV『現代美術と印刷物：Avalancheの時代』(仮) 2017年1月ー3月

■研究会関連

研究会“mandala musica” 発足のお知らせ

油井正一アーカイブの研究会である「拡張するジャズ」は、あらたに発足した研究会「mandala musica」の一部門となった。mandala musica は、その名の通り、多種多様な文化現象・社会現象を、音楽を立脚点もしくは出発点として考察していこうとする、領域横断的な「研究プラットフォーム」である。ジャズ史の研究会である「拡張するジャズ」の活動は、これまで通り継続する。その他の活動としては、① J-POPの海外での需要のありようを研究する「J-Melo Research」、② 「一般教養」としての楽器演奏のアンサンブルを学ぶ「※KMDワークショップ」、③ 音楽の学問史を研究するとともに、学際的な音楽研究を試みる「普遍音楽研究会」などが計画されている。「拡張するジャズ」の活動報告としては、3月22日に菊地成孔氏(音楽家)、4月7日に中川ヨウ氏(ジャズ評論家)の両訪問研究員を講師として、『マイルス再論!』のタイトルのもと、2回にわたって公開研究会を開催、今なおアクチュアルなジャズの偉人の業績について、活発な意見が交わされた。(※KMD=Keio Media Design 慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科)

■電子書籍化のお知らせ

以下のアート・センター刊行物をインターネット上で公開いたしましたので、お知らせ致します。ぜひご覧ください。

アート・センター『年報』23号(2015年ー2016年)

<http://www.art-c.keio.ac.jp/publication/kuac-annual/kuac-annual-23/>

PSI 国際パフォーマンス学会 報告書 英語版

<http://www.art-c.keio.ac.jp/publication/other-publication/psi2015tohoku-proceedings/>

ARTLET 第46号

発行日：2016年9月30日

編集：内藤正人 桑川麻里生 後藤文子 小菅隼人
徳永聡子

制作：印象社

発行：慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

TEL：03-5427-1621(直通)

FAX：03-5427-1620

<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

E-mail:ac-office@art-c.keio.ac.jp

COPYRIGHT ©2016
BY KEIO UNIVERSITY ART CENTER

アート・センターでは、講演会、ワークショップなどの催しや研究活動を随時企画しております。詳細についてはセンター HPをご覧ください。

慶	應	義	塾	大	学
ア	ー	ト	・	セ	ン
タ	ー				

KEIO UNIVERSITY ART CENTER